

もう一人いる

これも同じ人の話である。場所も同じ白山連峰で、登山道の拡幅作業で現場へ入った時のことだ。

その日は昼過ぎから天気が急変し、ガスが掛かってきた。最初は薄く霞む程度だったが、時が経つに連れて段々と濃霧の様相を呈し、三時前には三十センチ先も見えないくらいになった。

「さすがにこれは危ないからって撤収に入ったんですよ。後片づけをして降りるんですけど、前がまったく見えないんです」

そこで五人の作業員は一列になると前の人のリュックに手を掛けた。こうしてムカデ競争よろしく、よちよちと下山をしようというのである。

「いや、本当にそうでもしないと歩ける状態じゃなかったですからねえ。準備が整って降りようとしたら、班長が変なことを言うんです」

「いいか、何か来るかも知れないけど絶対に慌てるな！ 落ち着いて黙ってるんだぞ、絶対に慌てるなよ。そうすれば何もしないんだから」

彼には何のことか意味がよく分からなかった。

周りがほとんど見えない濃霧の中を一列で歩く。リュックに手を掛けた前の人の姿さえはつきりとは見えない。足元はまったく見え、先行人を信じて足を出すしかなかった。

“ザック、ザック”

緊張に包まれたままの下山が続いた。

その時……。

「おうい!! ちょっと待ってくれ、何か、何か来たみたいだよ」

一番後ろを歩いていた同僚が情けない声を出した。

「よーし、止まれー。後ろ向くなよー」

班長の声が霧の中に染み込んでいく。中ほどにいた彼には何が起こったか分からない。

「よーし、いっぺん腰下ろしてみよう、行くぞー、よっこらしょつと」

霧の中でムカデ競争は、いったん小休止して登山道に座り込んだ。その間、誰も何も話さなかった。

「よーし、ゆっくり立ち上がってみろ。せーのお」

ふたたび全員で立ち上がる。

「どうだあ、まだいるかあ?」

一番後ろの人はしばらくして、

「うーん、まだいるみたいだなあ……」

「そうかあ、よろしもう一度全員しゃがむぞー」

ふたたび霧の中でしゃがみ込む男たち。絵を想像するとこれは結構おかしいが、当人たちは必死である。

「次に立ち上がった時は大丈夫みたいで、そのまま下山したんです。後で聞くと、ああいう濃霧の日は何かが出るらしいんですよ」

あの時起こったことはこうだ。列の最後尾を歩いている人のリュックを何者かがぐつと掴んだのである。そんな時は絶対に振り向いてはならない。そして大声を出して騒いでもいけない。静かに少し待つのである。そうすれば、かならずその何者かは去っていくらしい。

「山に慣れていない人ならパニックを起こすでしょうねえ。それが滑落事故なんか繋がるんじゃないでしょうか」

後ろから掴まれた時に振り向くと何がいるのか班長に聞くと、

「さあなあ、とんでもない者がいるかもなあ……まあ霧が濃くて何も見えないんじゃないか
なあ」

見えない何かがそこにはいるようである。